

根のある変革への試論

二〇二二年一月二七日

目次

序章	2	経済は方法	18
課題の設定	2	没落と再生	19
歴史の現在	3	終章	21
方法の問題	4	言葉を耕せ	21
根なし草近代	6	互いを敬え	21
外発的近代	6	立ち連なれ	23
侵略と暴虐	7	参考文献	25
東電核惨事	7		
疫病の教訓	9		
問題の普遍性	11		
固有と普遍	11		
資本の歴史	12		
新自由主義	13		
人新世段階	15		
経済から人へ	17		
人は資源か	17		
非拡大経済	17		

序章

「根なし草言葉で根なし草近代を越えることはできない」

根なし草近代は世の底の規範を欠く

課題の設定

福島原発の核惨事と疫病の蔓延が日本列島を覆っている。核惨事がいつまで続くのかはまったく見通せないし、疫病の蔓延は繰り返される。そしていざい南海トラフなど日本列島をとりまく地層が動き大きな地震が加わることが避けられない。これが現実である。

ときの日本政府は、核惨事を覆い隠し、一方で疫病に対してはなら適切な対応をしない。単に愚かで無能であるのではなく、人民の犠牲のうえに資本の利益を優先する明確な意図をもっている。資本の側はこれを機に、高齢人口を削減し、小さな企業を潰して大きな資本の下に再編しようとしている。また、コロナ渦による農業危機を口実に遺伝子組換え作物を増産し、商業的農業を拡げてゆく。資本は疫病の蔓延さえも世界の再編に使う。

この政治がアベ政治、スガ政治といわれるものである。多くの日本人この事実と向きあわず、報道機関もまたこの現実を報じない。それでも疫病の蔓延からこのことを知る人が多くなった。コロナ渦はいまの世の有り様を可視化した。

このアベ政治、スガ政治は安倍や菅個人の問題ではなく、資本主義の終焉期という普遍的な場において、根なし草の近代日本百五十年の成れの果てとして現れたものである。

このままでは、たとえ安倍や菅個人が除けられ別のもに変わっても同じことが繰り返される。アベ政治、スガ政治から日本近代を省みるとともに、その教訓の上にこれからの方向を考え、動かねばならない。

大きく世界を見れば、気候変動の問題、その一つの具体的な表れである新型コロナウイルスの問題が、現代を覆っている。気候変動の問題、そして新型コロナウイルスという疫病の蔓延は野放的な資本主義の必然の結果である。

資本主義はこれをいわゆるショックドクトリンとして用い、新たなファシズム支配を進めている。しかし、資本主義の結果である以上、資本主義の枠の中でこれを越えることはできない。資本主義を終わらせなければならない。

いかなる道筋で資本主義を終わらせるのか。それは人民闘争しかない。資本主義経済を越えて生産者と消費者が直接につながり共生する、そのような地道な取り組みの積みあげと、それを土台とする人民の闘争である。これが資本主義を転換してゆく。

しかし近代日本においては、人民闘争は弱いものでしかなかった。人民の闘争によって資本主義を終わらせ、次の時代を開くために今何を準備しなければならないのか。

このように、この問題は世界中のそれぞれの地で言えることである。とすればそこには普遍性と固有性という問題が存在する。日本においては、根なし草近代という固有の問題が根底にある。これに対する変革は、この世直しが上辺のものではなく、根のある底からのものでなければならぬ。

私自身が、かつての活動に破れたとき、やってきたことは根の

ある変革の運動であり得ていたか、この問題に向きあわねざるを得なかった。『神道新論』では「序章」次のようにはじめている。

かつて、私は高校教員として地域の教育運動に取り組み、その一環として教員組合運動を担った。地域の底辺校であったその公立高校は、いわゆる行革の流れのなかで、その後廃校になった。教員を辞してからは政治組織の専従もしたが、それにもまた破れた。およそ四半世紀前のことである。このような闘いは、いずれにせよ敗北の連続で、破れたこと自体は一般的なことであるが、そのとき私は、組合や党派の機関紙などに書いてきた自分の言葉が、人の心にまでは届いていなかったのではないかということ、深く考えざるを得なかった。

この問題意識のもとに、その最初の試みであった『神道新論』をふまえ、次に段階を開かねばならない。それが根のある変革のための思想的準備である。歴史の現在を掘り下げ、それを越える途を探究することを基本の課題とする。

歴史の現在

二〇二〇年初頭にはじまる、新型コロナウイルスという疫病の世界的な蔓延は、新自由主義段階の資本の放埒な世界支配と改造の結果である。社会主義陣営崩壊後のこの四半世紀、資本の本性をむき出しにした新自由主義が野放図に世界を支配し改造してきた。その結果、資源開発、人口の増加、航空機の発達、経済活動の増加などを通して、動物居住地域と人との接触機会がますます高まり、新しい疫病が蔓延する可能性は高くなり、それが瞬く間に世界に拡散する。疫病の流行そのものは、今後もまた出てくる。

この新型コロナウイルスは、新自由主義の下に公的医療体制を破壊してきたイタリアやフランス、そしてアメリカで大きく拡大

している。さらにまた、南米やインド、アフリカにも広がっている。これは資本の放埒さをそのままにして解決することはありえない。利益を貪ってきた多国籍企業の弱肉強食のやり方ではどうにもならないところに来ている。

日本資本主義は明治維新にはじまる。これは、西洋帝国主義の外圧のもとになされたものであり、内因によるものではなかった。帝国主義の段階となっていた西洋に対して、植民地となることなく近代に入ろうとしたものであり、そこに能動的な意志が働いていたとはいえず、それ以前の世を継承した近代ではなく、そのゆえにそれは根なし草であった。

根なし草であることを受けとめなければならぬ。根なし草であるがゆえに、東アジアに対しては侵略と暴虐の限りをつくした。為政者はこの歴史から目をそらし続けてきた。人民は、この日本軍国主義の行ったことごとと向きあわねばならない。

日本列島に生きるものの問題は、自らの内から省みる他に途はない。つまり、内発的にこの問題に対さねば途はない。

近代日本において、いわゆる西洋思想は数多く紹介され、それに依拠して多くの論がなされてきた。それは今も変わらない。しかし、西洋帝国主義の圧力という外因によって近代化した日本がかかえる根本的な問題は、外因となった西洋の内の思想によって解決できるものではない。

近代日本の世の変革の運動の多くは、この根なし草近代の枠組の中でなされてきた。それを近代主義的左派と言うことにすると、この近代主義的な左派による世の変革運動は、人民を深く動かすことができない力のないものであった。

そして、これらの近代日本の抱える問題は、非西洋にあって近代化した多くのところに共通する課題である。非西洋にあって近代化したいくつかのところでは、反帝国主義、半植民地主義の人

民闘争を経て、その上に次の時代を模索している。

ところが日本においては、外発的に近代化し、しかもこのような人民闘争と内からの掘り下げの乏しいままに資本主義の終焉期に至った。そのために、人は人として立ち立たず、多くの人々は問題を掘り下げることなく現実をそのまま受け入れる。これが戦後の天皇制の中味である。あの敗戦に至る侵略と植民地支配に対する歴史的責任の追究はないうままに、したがってまた天皇制もそのままに、戦後政治に移行した。

『神道新論』で次のように書いた。

戦後政治は国家神道を根底から見直すことがないままにはじまった。それに対応して、戦争責任もまた内部から問われることなく、明治維新のうちに成立した官僚制などの基礎組織はそのまま残り、今日に続いている。

この象徴天皇制によって、まず戦後革命を抑え込み、そして、あれだけ「鬼畜米英を撃て」と国民を動員して数百万に及ぶ犠牲を出しながら、その後は一転、対米隷属の政治となる。国家の基本法である憲法に対し、その上に安保条約がある体制が戦後一貫して続いてきた。立憲主義が実際におこなわれたことはいちどもない。

ここに、いまの悲惨国家日本のその悲惨さの根源がある。

方法の問題

日本の世は、いずれ行きつくところまで没落することは避けられない。既存の価値観、つまりは資本主義の価値観において徹底して没落する。そのところにおいて、異なる価値観のもとにしか

再生はありえない。資本主義の終焉から次の段階を拓くという課題の、日本におけるあり方そのものである。

資本主義は人を資源と見なしてきた。これを、人が人であることそのことにおいて認められ、人として互いに敬い尊厳を認めあう、そのような世に変えてゆかねばならない。それは、生きるものの命とその環境を守ることを第一とする世のあり方に転換してゆかねばならないということでもある。生産者と消費者が直接につながり共生し、すべての分野において誰一人取り残さない世にしてゆかねばならない。そうしなければ、疫病の蔓延そのものも抑えることはできない。

近代日本の没落は、資本主義の基準とは異なる基準でこの世を作り直さなければならぬという歴史の求めなのである。経済を第一とすることから、人を第一とすることへの転換ということができるが、その内実を生み出すことは未来にひらかれている。そんな世は、思想的にも実践的にも、闘いなくしては生まれない。それでも、歴史が求めることは実現可能なことなのである。

日本のいまの世のあり方は、人と人の間についていえば、根拠を問わず、まことの語りあいを欠いた人と人の関係の上にある。これはまた、人が人として立ち立っていないことと一体である。このような関係のありかたは近代教育の結果でもあり、明治期に急造された近代造語による日本語によって、日常のこととして世にゆきわたっている。

したがってまた、これを越えてゆくためには、まず、この根なし草近代が日々の生活と政治を含む世のあり方に現れていることを自覚しなければならぬ。そしてそういうもの同士がたがいに語りあい、そのなかで言葉を改めて確認しあうこと、それがことをわると言うことであり、つまりは再定義の営みであるが、それが不可欠である。

方法の基礎にあるのはことをわる営みである。

ことわりという言葉の意味するところを、再定義と思索の基礎におく。理（ことわり）については、『神道新論』でその定義を述べた。

こと（言）をわる（割る）ことにより明らかとなること。ことをわって人が知ったそのものこと。ことをわって開かれたより深いこと。これがことわりである。

ことは、生々流転する世界を一つのまとまりで切り取りつかむ作用によって得られる内容そのものであり、したがってことわりは、つかんだものの道理、ものに内在する道理を意味する。ものは人の意のままにはならない存在であるがゆえに、ことわりは人の力では支配し動かすことのできない条理、すじ道、も意味する。

ことわりは、ことを割ることによって、人にひらかれるものとしてある。ことを割り、人にひらくためには、深い人の営みがあらねばならない。それ自体が、人の営みなのである。

『神道新論』においては、『夜明け前』を読むところからはじめて、「もの」、「こと」、「ことわり」等の日本語の基層まで至り、その基層において、「かみ」、「あのみすなわな心」をとらえた。

近代日本を根底から見直し、世のあり方を根本から変えてゆくこと、それが歴史の要求である。そして、歴史の要求は、実現可能性が存在するという条件の下で現れるのであり、したがってそれは、実現可能である。

そのための必要不可欠な準備として、『神道新論』の上に、ことをわり、言葉を再定義する営みを、今の世の考察の中でおこなう。それは、今の世のあり様を考え見直そうという人と人の対話である。その積みあげは、時代の扉を開くための基礎作業である。

近代日本の基本問題を、資本主義の終焉期という普遍的な枠組の中でとらえる。そうすると、実はそれぞれの地での具体的で現実的な問題の一つであり、そのゆえに、それはまた普遍的な課題であることが分かる。

こうしてわれわれは、新しい普遍性とその場における固有性の共生の実現という課題に出会う。この課題は、資本主義の終焉期に、それを越えてゆく実践を、固有性をふまえて現実化せよという歴史の課題である。

そして、扉を開け歩むための実践に一步踏み出す。これはそのための試論である。

根なし草近代

外発的近代

東洋の島国日本は、資本主義に食い尽くされ、さらに核汚染にさらされ、人々は困窮してゆく。これは資本主義日本の世の衰退そのものであり、百五十年を経た今、このままではいわゆる失敗国家となってゆくことが避けがたい。

非西洋にあつて最初に近代資本主義の世となった日本は、そこに固有の課題を抱えている。西洋が帝国主義の段階になった中でその圧力のもと、急いで資本主義化した日本は、江戸の時代からの内的発展によつて資本主義となつたのではなく、そのゆえに、その文化は根なし草であり、底の浅いものであつた。

では江戸時代はどうであつたのか。江戸時代の藩校では、会説といわれる、たがいに相手の論の根拠を問ひ話し、あうことが教えられていた。このような教育の土台のうえに、幕末のいわゆる勤王の志士など、江戸幕府を批判し倒幕のために崛起する人々が生まれ出た。

そのことを知っている明治政府のものは、明治政府への人々の批判を封じ、政府に従順であるように人々を導くために、根拠を問うことを教えるということを、教育からなくした。

日本近代の教育は、根拠を問うことを教えなかつた。言われたことをそのまま受け入れるようにしむけるものだった。「原発は安

全だ」と言われればそのまま受け入れる。「どうしてそんなことが言えるのか。根拠は何か」と問うことを教えない。

根拠を問うとは、すべてを疑い、現象を根本において捉えることである。さらにその根拠をも問ひ直す。この永続運動が科学である。従つて、根拠を問うという土台のないところに、まことの科学は育たなかつた。西洋の中に入り込み、そこを場としてかうじて一定の近代科学は育つたが、それは根の浅いものであつた。

その結果、日本の技術もまた、もの作りという与えられた枠組の中での手先の器用さはあつたが、枠組そのものを生みだすことはなかつた。教育の根本的欠陥の結果、枠組みを作ることができない。情報技術分野でも、世界規模での枠組は、日本では生まれなかつた。

これは情報技術分野だけの問題ではない。思想においても政治においても経済においても、この日本に、そこで営み続ける場としての枠組が生まれることはなかつた。

そのうえに、あの敗戦を総括することなく、そのまま戦後政治に移行し、東電核惨事でもやはりそれまでのやり方を変えられなかつた。いまなお原子力災害非常事態宣言中であるにもかかわらず、為政者はそれを隠して復興を言う。すべて、日本近代の基本的な構造的な欠陥の結果である。

このような日本近代の支配層は、長州は田布施の人、明治天皇たる大室寅之助、そして山縣有朋、岩崎弥太郎と続き、今日は安倍一族が連なる。彼らは、国家神道と教育勅語でもつて同郷の明治天皇を表に立て、近代日本を牛耳つてきた。そして、二度の大敗北に導きながら、そのことを総括せず、人民もまたそれを許し、その成れの果てにいわゆるアベ政治に至つたのである。であるから、この近代を根底から問ひ直すことと、アベ政治を終わらせることは一体なのである。

外からの圧力による近代化のもと、植民地主義や帝国主義へに対する人民闘争もなく、今日の日本に至っている。このような所においては、世のあり方をそのままにして、疫病の蔓延などに対応することはできない。

侵略と暴虐

外発的な根なし草近代は、東アジアに対する侵略と暴虐に至る。『神道新論』で次のように書いた。

こうして明治政府は国家神道を支配体系の根幹に据えた。国家神道は、国家を第一にして人を第二とする。それは現実には、国家の戦争に人々を動員するための役割をはたした。

そしてついにあの十五年戦争に至る。この戦争は日本の歴史において未曾有のことであった。南太平洋から東南アジア、東北アジア、中国大陆と朝鮮半島、いわば日本列島に住むものの祖先の地のすべてに兵を進めた。

もともと基本的な固有の問題は、近代の日本は、歴史と向きあい教訓を引き出すことをしない世であったということである。ここに、日本近代という固有性に根ざした問題がある。

そのいきつく果てが朝鮮人従軍慰安婦問題である。侵略と暴虐そのものであった。戦後政治において、この「慰安婦」問題と向きあうことなく、形だけを繕い実際には放置したままの日本国家の問題である。そして、それを許している人民の問題である。

一九九一年、日本の国会では政府が「慰安婦」制度は軍(国)が関わっていたのではなく、民間業者がやったことだと発言した。それに対して、金学順さんが名乗り出て告発した。

日本は、国家として内から「慰安婦」問題と向きあったのではなかった。問題の無時効性と、そして戦争責任の問題は一貫して回避され続けた。「慰安婦」問題は、普遍的な問題であり、また無時効性をもつ問題である。帝国の侵略における被侵略地の女性に対する人権侵害であり、それはその当事者が亡くなっても、問題を抉り出し責任を追及することにおいて時効ないということである。その追究と歴史の研究交流には、国境を越えて未来を共有する可能性を提案する役割がある。

二〇二一年一月八日、韓国地裁は慰安婦訴訟で、日本政府に賠償を命じる判決を下した。これは当然の判断である。それに対して日本政府は、菅首相を筆頭に、断じて受け入れられないと猛反発している。これを批判して報じる報道も、そもそも野党からの批判さえ何もない。

歴史に向きあわず、植民地支配を省みず、ただアメリカに従属してきた戦後政治の成れの果てがアベ政治、スガ政治であり、この韓国地裁の判決は逆にこの戦後日本を照射する。それだけの意味をもつものである。

根なし草近代の一つの帰結としての「慰安婦」問題と向きあわなければ、根のある変革はありえない。

東電核惨事

二〇一一年三月の東京電力福島原子力発電所核惨事は近代日本の結末として起こった惨事であり、今後ますます惨事であることが明確となることであった。この核惨事は、日本語のことわりと断絶した近代漢字造語に支えられた日本国の官僚制を中心とする無責任体制が生み出したものである。これをのりこえるためには、

近代日本語をこの核惨事という経験を通して再点検し再構成することが不可欠である。

まさに、われわれは今、福島原発の核炉崩壊以降を生きている。核炉崩壊の意味とは何か。それ以降の世をいかに生きるのか。それが問われる世を生きている。

原子力緊急事態宣言は今も続き、これを根拠に被曝許容範囲の制限も福島ではないに等しい。そのことを覆いかくし、終わったことにする力が今の日本を支配している。地震列島に五十六基もの原発を作ったのは、そこに利権と利潤の拡大を求める日本の資本主義である。

そしてこの資本主義は原発事故とそれを受けて発令された原子力緊急事態宣言を覆いかくし、今が核炉崩壊「以降」にあることを否定する。しかし、いかに覆い隠そうとしても、核惨事の中にあるという事実は、厳然と現実化する。

戦後日本政府は、「核兵器」のように兵器には「核」を用い、発電などには「原子力」を用いできた。そこには、広島・長崎に落とされた爆弾と発電を別のものとする意図がある。しかし、あの爆弾と発電は同じ原理である。本稿では、基本的に「原子力発電」ではなく「核力発電」または「核発電」を、「原子炉」にかえて「核炉」を用いる。一方、原発を脱しようとする運動のなかで用いられている「脱原発」「原発廃炉」などの「原発」は、それを引用するとき、本稿でも用いる。

東京電力福島第一発電所の引きおこした核惨事は、かつての十五年戦争の敗戦につぐ近代日本の第二の敗北であった。近代日本に内在する基本的な問題が、二つの敗戦に通底している。

九年前、福島原発の核炉が東日本大震災で崩壊したとき、これを教訓として、近代の世のあり方を問い返さねばならなかった。しかしそれはなされず、それどころか、これをいわゆるショックドク

トリンとして利用し、惨事に便乗して新自由主義の政治がおつぱらになされてきた。それがアベ政治である。

二〇二〇年をまたぐこの数年の世のあり様をひと言でいえば、近代国家の枠組とそれを支える柱の崩壊である。東電核惨事ではあれだけ核汚染をまき散らしながら企業責任は問われず、安保法、共謀罪法、入管法改変などが強行採決によって成立した。そして首相が収賄と便宜提供の当事者であることが白日の下に曝されても、その罪が問われることはない。

かつて造船疑獄があった。戦後日本の計画造船における利子軽減のための「外航船建造利子補給法」制定をめぐる贈収賄事件である。一九五四年一月に強制捜査が開始された。吉田茂は法務大臣に対し指揮権発動を命じ、検察の捜査を止めさせようとした。これが大きく報道される。結局、政界・財界・官僚の被疑者多数が逮捕され、吉田茂内閣が倒れる発端となった。ここにはそれでも近代国家の基本原則である法治主義が働いていた。

それに比して、安倍首相の収賄は首相そのものの犯罪であり、はるかに悪質で規模も大きい。また、公文書を偽造し、国家の基本的な統計も改ざん操作してきた安倍政府とその官僚の悪事は、造船疑獄の比ではない。しかし捜査すらなされない。

実質賃金は下がり続けているのに、賃金上昇と景気拡大が続いているかのように偽装してきた。大手の新聞やテレビは政府の言うままに報道する。それはもはや報道機関ではなく洗脳機関である。

だが、この事実のうえに、さらに考えねばならないことがある。安保法制反対の運動のとき「戦後七〇年を迎えた今、立憲主義はかつてない危機に瀕している」ということが言われた。立憲主義とは何か。それは、その国の最高法規としての憲法を国民が定め、国家がこれを遵守し、そのもとの政治をおこなうということである。では、戦後日本の最高法規は憲法であったか。

占領が終わってから今日まで、日本国憲法の上には日米安保条約があり、日本政府の上には高級官僚と在日米軍からなる日米合同委員会がある。

鳩山民主党内閣はこの合同委員会によって潰された。安倍内閣はこの合同委員会の指示によって、法を超えて権力をにぎり独裁政治をすすめ、戦争法などの諸法を作った。その仕上げが改憲である。すべては米軍と軍需産業資本のためになされている。

さらに、沖縄は講和条約において「アメリカは沖縄で全権を行使する」と規定され、「無憲法・無国籍」のまま今日に至っている。

それらの背後にあるのは、在日米軍を権益の一つとする国際的な軍需産業とその国際資本である。日本の官僚はこの在日米軍を後ろ盾にしている。沖縄・辺野古に巨大な基地を作るのは、アメリカの必要からではない。後ろ盾である米軍を日本に引き留めるためである。原発を再稼働するのは電力のためではない。アメリカとそれに従属する日本の核戦略のためである。

立憲主義は日本において、事実としてなかった。したがって、「近代国家の枠組」の崩壊と言ったが、正しくは「立て前としての近代国家の枠組」であり、それさえ崩壊したのが昨今の現実である。

こうして今日の日本は、国際資本の収奪に国家と国民を完全にゆだね、すべてをそこに捧げる政治体制となっている。ここまで酷いことは、歴史上はじめてである。一度は墮ちるところまで墮ちないと何も変わらないのかも知れない。

しかしそれでは犠牲が大きすぎる。現実には、疫病の蔓延とそれによる経済の破綻のしわ寄せを人民に押しつけ、これを機に独占資本の支配を強化しようとする政治の下で、大きな犠牲が広がっている。

疫病の教訓

序章において書いたように、新型コロナウイルスという疫病の世界的な蔓延は、新自由主義段階の資本の放埒な世界支配と改造の結果である。それは間違いない。しかしさらに考えるべきことは、このような資本主義が実際になされてきたのであり、それを許してきたという、この半世紀の歴史である。

これに対して、経済拡大によらない地球生活の維持と再生産の仕組みは可能なのか。核惨事の起こる前年に浜矩子は『死に至る地球経済』において「悲惨な結末を回避したければ、思い切った耐え難きを耐え、不可能を可能にする」と述べた。これはそのまま原発を維持するののか、廃棄してゆくのかの問題にあてはまる。産業廃棄物としての使用済み燃料の処理方法さえもないのにもかかわらず、歴代自民党政権は五十六基の原発をこの地震列島弧に作ってきた。

これは資本主義か否かの問題である。

これを許してきた結果、疫病の蔓延もまた資本拡大に利用される。資本の側はこの疫病の蔓延を機に、一層の、新たな形式による世界支配をうち立てようとしている。

資本主義とは絶えず拡大しなければ持続し得ないものであるなら、地球という有限の船の上で、それは永遠ではありえない。浜矩子の言うように、リーマン・ショックの本質をこの五百年来の近代世界の行き詰まりそのものである。そしてそれをのり越える叡智が求められていることを説く。それは説得力がある。二〇二〇年の疫病もまた、その叡智を生み出すことを求めている。

だがしかし、いずれも開かれたままの問題であることはかわらない。資本の側は、軍事のような限界のある方法ではなく、情報技術を用いた新たな経済拡大と支配体制の変革を狙っている。

それに対して、われわれの側も、あらたな途を見出さなければならぬところに来ている。使用済み燃料の処理方法未解決という問題ひとつとっても、これをおおやけにし、その上でこれをどうするか、智慧を集めて方法を見つけねばならない。しかし未だにここに大きな問題があること自体が隠されている。

人はどのようにこの転換を現実にしてゆくのか、これが普遍の問題である。その方法を見いだし、それを担う人を育てる。これが現下の歴史の課題である。『神道新論』において「さち」について述べた。その前半部分を引用する。

人はいのちとして働き、ものと語らい、ものから生きる糧（かて）としての「さち」を受けとる。「海の幸」「山の幸」のサチであり、世界が人に贈るもののことである。「さち（矢、幸）」は「サツ（矢）」の転。矢という道具のもつ獲物を捕る威力、霊力。幸の意味である。

日本語はタミル語に由来する言葉が多いのであるが、サチはそれより古く、おそらく縄文時代からあった言葉ではないか。この言葉を生かすことで、現代の生産というものを少しことなる観点から見ることができると。

人はものと係わり、ものごとをわり、世界から生きる糧を得る。それが人のいのちのはたらきである。糧を得るそのちからがさちである。人々は心を一つにして一心不乱に働き、さちの力をその身に得る。田畑、山野、海原、工場、商店、学校等のあらゆる場において、耕す。そのとき世界は人々に豊かなものを贈り届ける。さちは何よりちからであり、働きである。

さちは、そのちからによって得られた糧そのものでもある。海の幸、山の幸、自然のめぐみ、このような直接贈られたもの

もさちなら、すべての作られたものもまたさちである。人がことをわり、そして贈られたすべてのものがさちである。命そのものとしてのたま（魂）が、見えないところにこもり、新しいものが現れるように、蚕が蛹から孵るように、稲穂が実るように、それまではなかったものが現れる。耕すことによつていのちがこもり、はじめて、さちはなる。

さちを受けとる働きが、人が世界に生きてあることの姿であり、世界の輝き、世界の響きあいそのものである。人はこのさちを、協同して働くことによつて受けとる。さちを得て生きることが、人がこの世界で生きることそのものであり、その実現は人の人たるゆえんの実現である。さちを受けとるとき、人は幸いである。それが人のいのちの輝きである。「幸い」とは、ものが成るはたらきが頂点に達し、内から外に形を開き、いのちのはたらきが盛んな様そのものである。

人と世界が存在する意味は何か。この問いは大きい。しかし少なくとも、その意味が資本に根拠をもつことはあり得ない。その根拠は、さちを受けとる喜びこそが、意味の有無を超えた輝きであるというところにある。

問題の普遍性

固有と普遍

前章では、核炉崩壊以降の日本の現実から、われわれの歴史の課題を考えてきた。ここにある問題とこれに対する課題には、日本列島弧にすむわれわれ固有の問題と、さらにそれがおかれた世界大の普遍的な問題がある。問題や課題は普遍性をもつ。しかし同時に問題や課題はつねに現実の関係の中に存在する。つまりつねに個別性と固有性をもっている。

この固有の問題は、どのような普遍的な問題の場にあるのか。そしてそれはどのような関係の下にあるのか。これを深く考えねばならない。

現代世界の普遍の問題とは何か。それはつまり、歴史の現段階の課題は何かという問題である。八百年続いた経済拡大を第一とする政治体制は、もはや持続することができず、終焉に向かいつつある。これが客観的な事実である。資本主義は、その回りに周辺を置き、そこから収奪する。この拡大再生産を維持しなければ破綻する。しかし現代、もはや資本主義が周辺となし得るのはその内部の架空空間のみである。そして資本はそれを手段として、人民の搾取と収奪するしか、もはや利潤は得られない段階にいらっている。これ以上の実体ある拡大はありえないし、拡大を旨とする経済は終焉が不可避である。

こうして、経済から人への大転換という転換の本質を明らかにし、転換の方法を具体的に見いだすという問題そのものは普遍である。

まず何より、互いの固有性を認めあい、ともに生きる場を生みださなければならない。この場それ自体が新たな普遍であり、この普遍は、西洋が作り出した「普遍」とは異なり、固有性を他方に押しつけることはしない。

西洋近代の偽りの普遍とは異なる普遍は可能なのか。固有性を認めあう場としての普遍性は、現実に存在しうるのか。当面する過渡期の課題である。このような場に蓄積される力が、新たな政治力とその組織方法を生みだす。世の新しい形は、これまでもこのようにして生みだされてきた。

しかしまた、歴史の課題に耐えきれず、あるいは押しつぶされ霧散して歴史から消えた固有性は、かず知れない。東電核惨事から教訓を引き出すことなく核力発電所の再稼働をすすめるなら、日本列島弧の人の歴史は終わるかも知れない。そのような可能性にまで直面していることを確認しなければならない。

欧州もまた固有な問題をかかえている。その一つが移民問題である。西洋帝国主義による植民地支配の結果、社会の基盤が崩壊し、そこで生きることが困難になった人々が欧州に移民としてやって来る。そして引き起こされる世の分断は、資本主義の終焉期という普遍的問題の内における、現代における欧州の固有の問題である。

歴史は、いかに紆余曲折を経ても、その段階において、到達すべき所に到達する。現代についていえば、人の原理が息づき、いのちと言葉が輝きをとりもどすときは来る。たとえ、日本列島弧に世代を継いできたわれわれが、そのための捨て石になったとしても、経済から人への大転換は、必然である。

この深い普遍性を担うことができるのかどうか。それは開かれた実践の課題である。そして、核惨事の渦中のなかで、この歴史課題を現実には担う人の条件を考える。普遍の場におけるわれわれの固有の課題はこのように位置づけられる。

資本の歴史

この八百年は、宗教を立て前としながら、領土的、政治的、経済的支配を拡大する西洋文明の時代であった。

それは、一一八一年、一二〇九年、一二二六年に行われたアルビジョワ十字軍にはじまる。北方のフランク王国が、南フランスのラングドック地方に栄えていたグノーシス、そしてカタリ派を柱とする地中海文明を滅ぼした西洋内部の大きな転換点であった。

北方フランスの領土拡大欲をもつ封建領主と、カタリ派の拡大に危機感を抱いたカトリックは利害が一致し、「アルビジョワ十字軍」を派兵する。トゥールーズ伯、カルカソンヌ伯など南フランス・ラングドック地方の領主たちは、自身はカタリ派ではなかったが、北方領土の領土拡大に抵抗、領民と力をあわせて徹底的に抗戦した。結果はラングドック側の惨敗に終わった。百万人が殺され、カタリ派を擁護する領土は領土を没収、追放された。

アルビジョワ十字軍は、強固な城壁を持つカルカソンヌにおいて大きな抵抗にあう。カルカソンヌ城はベジェ・カルカソンヌ伯、トランカヴェル家の居城で、同家が君臨していた一〇八四年から一二〇九年までがカルカソンヌ地方の全盛期であった。アルビジョワ十字軍側は「和平交渉をしたい」と称して、ときのカルカソンヌ伯レイモン・ロジェを城外に呼び出し、そして捕らえた。指導者を失ったカルカソンヌは、以後十五日で陥落す

る。レイモン・ロジェは自分の城の石牢に幽閉され、三ヶ月後に二十四歳で死んだ。

ローマ法王の指示でドミニコ会による宗教裁判が行われ、異端とされるものは容赦なく火刑にされた。その後カタリ派の勢力は衰え、一三二一年に最後の信者が火刑となりカタリ派は絶滅した。異端審問、政治・経済・教会が一体となって領土と経済圏を拡大する。この方法がこの後、世界大に拡大されてゆく。それらの方法が、すべてこのアルビジョワ十字軍に現れている。西洋資本主義拡大の方法が基本的にこのアルビジョワ十字軍で見出されたのだ。

『一叙事詩をとおして見たある文明の苦悶』や『オク語文明の靈感はどこにあるか』などの著作で、シモーヌ・ヴェイユは失った文明への愛惜を書く。ナチスによるフランス北方の占領を避けマルセイユに避難していた時期に、地中海の風土の中で書かれたものである。地中海文明を滅ぼしてはじまった西洋文明が、ヴェイユの時代、ついにファシズムに至ったのだ。

それでもこの地で用いられてきたオク語は滅びなかった。フランス革命が勃発するとラングドックの人たちもこれに参加、オク語を公用語とする自治区の形成が試みられた。しかしジャコバン派の反発で頓挫してしまふ。革命が潰れてもオク語復権の機運は消えなかった。高まる運動が分離主義に繋がる事を危惧したフランス政府は、一八八一年にオク語の学校教育を法律で禁止した。

革命を経て成立した近代フランスは、フランス語で国民国家を形成しようとする指向性を強くもつ。だから、オク語はフランス語の方言とされている。しかし事実上フランス語とは異なる系統の言葉であり、近代のフランス語への同化政策に抗して今も六百万人の話者をもつ。

アルビジョア十字軍の経験は、イスラムに対する十字軍を変質させた。

一〇九六年から一〇九九年にかけて、セルジューク朝の圧迫に苦しんだ東ローマ帝国皇帝アレクシオス一世コムネノスの依頼により、一〇九五年にローマ教皇ウルバヌス二世がキリスト教徒に対し、イスラム教徒に対する軍事行動を呼びかけた。

アルビジオア十字軍は、これが西洋世界内部でおこなわれ、宗教に名を借りた領土拡張であった。そしてこの方法が再びイスラム世界、そして非西洋世界の侵略と収奪に用いられる。奴隷貿易と植民地支配である。当時、ペルシアやイスラム帝国・アッバース朝は繁栄を極めていた。十字軍はその地に侵略し、さまざまな文物を略奪して持ち帰る。それが水揚げされたのがヴェネチアなどの都市であった。その典型が一二〇二年にはじまった第四回の十字軍であった。

その収奪を基盤に商業が拡大する。その経済の力とさらなる拡大を求めて、一四九二年頃のコロンブスらの航海とスペイン・ポルトガルによる「世界分割」が始まる。一四五三年に東ローマ帝国がオスマントルコに滅ぼされ、東方の知識人がイタリアに移動、これがその経済と結びついてルネサンスがはじまる。

つまり、略奪文物と地中海交易の基盤のうえに東方からの知的刺激、これらを基礎にルネサンスがはじまった。それと併行して、東方への侵略が世界大に広がっていった。奴隷貿易もまたこうしてはじまり、長い植民地支配による収奪とあわせて、アフリカの社会基盤は徹底して破壊され、現在においても大きく損なわれている。

この非西洋世界の収奪のうえに、資本主義経済を土台とする欧米中心の世界が成立した。これが近代である。

そのうえに、技術の爆発としての産業革命がある。人にとって火は根元的なエネルギーであり、言葉は本質的な方法である。人は、火を使い、協同して働き自然からめぐみを受け、言葉を獲得

し、人となった。言葉を使い経験をまとめ、掘り下げ、伝え、智慧を磨いてきた。言葉を持つことによってはじめて人は考える生命となった。言葉によって協同して働き、道具を育てていった。道具を媒介にした協働の方法が技術である。

人は、自然界にあるものを受けとるという段階から、大地を耕し植物を育てまた動物を飼う段階へ転化した。それが新石器革命であった。その転化の一つの到達点が産業革命であった。産業革命を考え方として準備したものは何か。それが、ニュートン力学とデカルトの近代的世界観であった。つまり、自然を変革するために、自然の法則を対象化して認識し、具体的現実に応用する、これを最後まで進めたのが産業革命なのである。

十八世紀の自然科学の成立は、デカルトの二元論をその根拠とした。ヨーロッパ近代は世界を物質世界と精神世界に分離したうえで、その物質面の探究に専念した。十八世紀に成立した自然科学は、時間と空間を、物質が存在し運動する枠組みとして、あらかじめ前提した。これは、言葉によって人が自然を対象化して認識した時以来育ててきた世界認識のひとつの型であり、ニュートン力学はこの人の世界を認識する仕方の集大成であり、その極限であった。西洋近代の資本主義文明はここに根拠をもっている。

しかし同時にそれは生命を物質に還元し、人を個別の人に切り離れた。人をばらばらにすることは、近代資本主義が人の働くということそのものを富の源泉として搾取るうえで、必要ものの方であった。

新自由主義

いま、資本主義は最終の段階、つまり終焉期に至っている。社会主義陣営が崩壊することによって、資本主義は自己規制から解

放され、資本の論理にのみしたがって動く。それが、サッチャーやレーガンの時代に顕在化した新自由主義である。

『資本主義の終焉と歴史の危機』にあるように、資本主義とは中心部が周辺部を収奪しながら拡大するシステムそのものであり、拡大・成長は資本主義の存在条件である。ところが地球は有限である。もはや現実には拡大する余地はない。したがって、拡大のシステムとしての資本主義は終焉する。日本はその先端を行っている。ゼロ金利になって二十年。ゼロ金利とは投資に対して利益を付加することができないということであり、最初に日本がその段階に達した。

実体経済活動への投資では利益が出ないので、資本主義延命策として周辺部を国内に作り、そこから収奪するしなくなっている。しかし、この方法は、結局国内の購買力を衰退させ、行きづまる。あるいは、アメリカのように金融空間を作り出し、金融空間で周辺部から金を集める。しかしこれは必ずバブルの崩壊を招く。さらにまた、EUのように欧州帝国を作り出すことで生き延びようとするところもあるが、帝国の中の周辺部からの収奪を強めれば結局は収奪されたところにおいて危機が起こる。いずれも擬似的に拡大する場を作ろうとしてきたが、それらの方法はもはや限界に近づいている。

アメリカ、日本、EU、中国の現政府がやっているような延命策は、早晩、大きなバブルの崩壊を招く。そのとき多くの人がある犠牲になる。何とかいわゆるソフトランディングする途はないのか。それが『資本主義の終焉と歴史の危機』の問いかけである。

世界は多極化するといわれる。これ自体は不可避である。だが多極化すれば問題が解決するのではない。多極化とは、政治的には中国やインドや南アメリカ、アフリカ諸国の経済成長と政治的な力の増大であるが、それはやはり近代の範疇に属すること、資

本主義の枠の内のことであり、経済の拡大を旨とする方法はそのままである。

結論ははつきりしている。地球という有限の場で永遠に経済拡大を続けることなどできない。それでも国家が介入して拡大を維持しようとするれば、今度は国家財政が破綻する。日本もまた稼ぐよりもはるかに多い借金をくりかえしている。このままでは総破産である。

客観的な事実として、またどれだけの時間がかかるかは別にして、帝国アメリカは終焉に近づきつつある。帝国は戦争によって解体する。ベトナム戦争、イラク戦争、アフガン戦争、この戦争が帝国アメリカの崩壊のはじまりであった。さらに経済戦争である。経済は不均等に展開する。政治力、軍事を背景に基軸通貨としての優位性を最大限に用いて、新自由主義の弱肉強食・拝金主義経済を進めてきたアメリカの方法は、実はそれしかなかったのである。

しかし土台において国内産業は衰退の一途をたどり、大きな矛盾が蓄積されてきた。二〇〇八年の経済危機は矛盾の爆発の序章に過ぎない。二〇〇八年危機以降の経済危機を取り繕うため、今日までドルやその支配下にある円は無制限に刷られ続けている。これは資本の暴走である。暴走するアメリカ資本主義は再び経済破綻に陥る。遠からずドルは暴落する。

帝国アメリカは現代のローマ帝国、崩壊過程に入ったローマ帝国である。アメリカとの関係は、崩壊しつつある帝国との関係をどのようにするのかという問題である。帝国アメリカを率いてきた産軍複合体の力は今しばらく強大である。東アジアにも緊張を生みだし、日本の防衛大綱も改定させた。尖閣問題もこの産軍複合体の手の上のことである。すべてはアメリカ産軍複合体の政治工作である。日本の政権は、民主党であれ自民党であれ米国産

軍複合体の東洋における先兵となり、米軍存在の矛盾を沖繩に押しつけてきた。

二〇二〇年、白人警官による黒人市民の虐殺に対する抗議の行動は大きくアメリカを揺るがしている。新自由主義は経済問題と同時に、人と人の分断、差別と迫害を伴う。アメリカにおける人種問題が、新自由主義の中で警官による殺人にまで至り、そしてついにかつてない普遍的で一般的な、異議をもつすべての者が加わる暴動になった。

これはアメリカを変える。人類の課題としてのアメリカ問題は、アメリカ内部から、歴史の壁が突破されつつある。アメリカ内部の問題ではない。すべてのものが、いまアメリカで起こりつつあることを自覚的にとらえることが、歴史に求められている。

であるなら、日本においては「アメリカ産軍複合体一政・官・財癒着」の構造とその支配を打ち破り、アメリカに対して自立する、ここにしか日本列島に生きるものの活路はない。そのうえで、広島・長崎・福島を経たわれわれにとっては、アメリカから独立するかどうかの問題に終わってはならない。

資本主義のゆきつく果てとしてのアメリカの問題、つまりアメリカ問題は人類全体の問題である。原発の問題もまた、原発に依存しないエネルギーを開発して原発を止めると言うだけの問題はない。アメリカの核戦略に対して核兵器の本当の廃絶という問題である。つまり、日本において顕在化した諸問題の根拠を遡ると、アメリカの存在や核兵器の存在をそのままにして、日本だけが脱原発しアメリカから独立するという問題ではないことがわかる。

人新世段階

「人新世」という地質学上の概念がある。それが定義される歴史段階に至る過程をふりかえる。

産業革命を土台とする自然認識技術の発展によって、ニュートン力学では説明できない現象が次々と発見された。産業革命がやがて製鉄などの重工業に広がりを見せると、キルヒホッフは溶鉱炉の研究から一八五九年に黒体放射を発見した。黒体放射のスペクトルの理論的研究は、統計力学と結びつくことによって量子力学の基礎となる理論を与え、最終的にプランクによってプランク分布が発見された（エネルギー量子仮説、一九〇〇年発表）。また一八八七年前後のいわゆるマイケルソン・モーリーの実験は産業革命以降の技術なくして不可能だった。その結果、光速度一定やローレンツ収束が発見された。

その思想的掘り下げのなかから相対性理論と量子力学が生まれた。それは、現象の時間・空間的かつ因果的記述に対する制約を暴露し、時空概念の絶対性を奪い取った。ニュートン力学が生み出した近代の生産技術は、逆にニュートン力学を乗り越える事実の存在を人に示した。

それまでの「問いの枠組み」が事実によって転換を求められた。ニュートンの時間と空間を前提にする世界観の超越的枠組みは、相対性理論と量子力学においてとりはらわれ、その世界観は「発展する物質」としてのこの世界自体の認識を一步一歩深めることを可能にした。相対性理論と量子力学は、時間・空間が物質存在と運動の前提ではなく、逆に物質が「運動しつつ存在する」ことが、そこに時間・空間の「ある」ことである。このことを明らかにした。

核炉は、重い物質の核分裂によって質量欠損が起こり、その欠

損した質量 m に對し、光速を c とすると、エネルギーと質量の等価性 ($E = mc^2$) にもとづくエネルギーが放出されることを根拠としている。ここに光速 c が定数として入ることは、そのエネルギーが膨大であることを意味している。これが核力である。

また今日のいわゆる情報技術、その土台としての半導体技術や超伝導技術の前進、情報通信網の劇的な普遍化の土台には、量子力学が基本思想と理論として存在している。これぬきにかななる先端的情報技術も不可能であった。いわゆる「ナノ技術」も含め、情報技術の土台は、すべて量子力学が基礎理論となっている。

相対性理論と量子力学によって人は核という現代の火を手にし、情報技術を獲得した。これは本質的には、かつて人をして人とした、火の使用と言葉を生みだした有節音の獲得に匹敵し、それを新たな段階に進める根本的意義を有している。

大切なことは、それは近代の合理主義が生みだしたそれ自身の対立物だということである。西洋近代合理主義は科学を生みだした技術を発展させたが、その結果、近代思想の枠を超える事実とその理論、相対性理論と量子力学が発見された。

近代思想にもとづく諸体制では、それを越える理論によって得られた力を制御することが本質的にできない。質量欠損そのものは人の制御の下にはなく、放出されるエネルギーは膨大であり、また核分裂の放射性生成物の処理も出来ない。地中奥深く埋めようとしているのが関の山なのである。そして生まれた核力は、大地震によって崩壊し、その惨事はひとたび起これば数万年におよぶ被害をもたらす。

「人新世」という地質学上の時代区分は、人類が地球の地質や生態系に重大な影響を与えるようになった段階を意味する。いつにその始まりをおくか。一九四五年、アメリカがはじめて行った核実験であるトリニティ実験を起点とするという意見が多数であ

る。これに賛成する。人新世とは、地球史の中で、人の営みもとしての地球を変えてゆく段階である。

一九四五年のアメリカの核実験を人新世の起点とするということは、人新世とは、制御不可能な力による環境の改変であるということも意味する。

実際、近代思想の枠、つまりはニュートン力学の枠のなかでは、それを越える相対性理論と量子力学にもとづく核力を御することはできない。制御できない力による地球の改変、これがなされるようになった段階こそが、人新世である。

人は、火と言葉によって人である。だが、ニュートン力学の枠にある近代社会は核力という新しい火と情報技術という新しい言葉を使いこなすことはできない。そして、事実として、福島核炉は崩壊した。核惨事を生きるものは、この教訓をつかまねばならない。

二〇二〇年の疫病の蔓延はまさにこの人新世に起こったのだ。であるから、これは野放図に世界を支配し改造してきたことに対する生態系の側からの揺り戻しなのである。拡大し続けてきた人の世界の歴史は、大きく転換しなければならない段階に来ている。世界的な疫病の蔓延はそのことを意味している。

その上で確認しなければならないことは、この人新世段階もまた資本主義が生みだしたものであることである。人新世を地質学的な概念である。しかしそれを生みだしたものが資本主義であるというこの問題の階級性を問うことを欠いては、次の段階は開けない。

経済から人へ

人は資源か

日本では「人的資源」という言葉が用いられてきた。中央教育審議会は一九七〇年代「人的資源の開発」を言いはじめ、教育を生産活動の一部とする考え方が表面化する。「人的資源」とは生産活動に必要な労働力ということである。人を人として育てる教育から、人を資源として使えるようにする教育への転換がはかられ、今やそれが一般的になっている。

もとより近代の学校制度は、産業技術を習得した人の育成を目的にしている。その時代の文明とそれを支える技術を習得することとは必要である。人が何らかの生産につながることは、人の存在条件そのものである。だから仕事を求める人すべてに仕事を保障する。それは人の尊厳を尊重するということだ。

だが、「人的資源」という考え方がいきわたること、この関係は逆転され、正面から人は「資源」であるという主張が行われてきた。これはまさに資本主義の見方そのものであり、その結果として、格差と、そして貧困が拡大してきた。

このような近代のあり方、人を資源と見なす世のあり方は、人と人の間のあり方、地域と地縁のあり方、そしてそのうえにある街や世のあり方についてまで及んでいる。

今日、格差は拡大し、そのみならず貧困のあり方が大きく変

わってきている。根底にあるのは、人を資源とみなす世のあり方である。

「人」という言葉についても『神道新論』でその定義を述べた。

ヒトのヒは「ひ（霊）」とおなじ。「ひ（霊）」はタミル語 *pa* に起源をもち、いのちの根源的なちから、いのちの根拠を意味する。元来「ひ（日）」とは別の言葉であった。しかし古事記の時代、すでに「ひ（霊）」を「日」で表しており、早い時期から「ひ（霊）」は太陽の生命力、太陽神の信仰の根源と考えられてきた。トは「処」、つまり場所を意味する。よって、ヒトはいのちの根拠である「ひ（霊）」がとどまるところを意味する。これが、日本語が人をつかんだ原初の形である。

長く使われてきた「人」が近代になって改めてとらえ直され、「人間」という言葉が近代日本で用いられてきた。これは西洋語の翻訳語でもある。しかし、上述のように、「人（ひと）」には近代の見出した「人間」を超える意味が込められている。よって、ここでは、人—人間—人の第三段階の言葉としての「人」を用いてゆく。日本語は人を資源とはとらえていない。霊のとどまるどころであり、そのゆえにそれはいささかもおかすことのできない尊厳をもち、そういうものとして互いに認めあうべきものにとらえてきた。この日本語に伝えられてきた智慧に立ちかえらねばならない。

非拡大経済

近代の資本主義をのり越えるという課題、ここに人類が直面している課題があることが明らかになる。その一方で、アメリカも、日本も、*pa* も中国も、時の政府や既得権層はこの基本問題を隠そ

う隠そうとする。問題指摘とその隠蔽のせめぎあい、それが現代である。

資本主義がゆきづまるのに応じて、一方で民族主義、排外主義が一定の勢力となる。それはつまるところ、ファシズムに至るのであるが、反ファシズム、反排外主義の運動もまた、世界大に広がっている。このような運動のなかに、資本主義をのりこえる契機が生まれている。

三年間の野党時代を経て再度政権を取った自民党は、かつての自民党ではない。アメリカのもとで軍を世界に展開しようとするファシズムの党である。もとよりマスコミもこの本質を伝えない。かつて自民党に投票してきた層が同じ考えのまま変質した自民党に投票する。金融資本と帝国はその本質として、常に最大の利益収益、拝金主義的活動を展開してきた。こうしてアベ政治の七年半は、日本は凋落を深める一方であった。

搾取と収奪のためのあらゆる合法的方法がなくなったとき、資本主義はその維持のためファシズムを登場させる。アベ政治とその背後の日本会議などの画策することはまさにこれである。しかし、これはすでにかつてやりそして大敗北した日本軍国主義の幻影でしかない。彼らは、国家神道と軍国主義の復活を求めているが、そこには資本主義のとりあえずの拡大を求めることができないのであり、そこに活路はない。

戦後日本は、後追い資本主義として、資本主義的拡大を短い時間のうちに実現しようとし、同時に核兵器製造力とを保持しながら、無理して無理してやってきた。その果ての「悲惨な結末」、東電核惨事であった。そこにあるのは、拡大しなければ存在しえない資本主義そのものである。

だが、長い人の歴史において、拡大を旨とする経済は資本主義のみである。拡大することのない経済はかつても存在したし、可

能である。それは、経済は方法であって目的ではないとする人々が、資本主義後の経済を行っていると自覚のもとに、横につながり、資本によらずにものを廻してゆく経済である。

実際、生産者と消費者が直接につながり共生する地道な取り組みが広がっている。このような営みが、資本主義からの転換の運動として横に繋がり輪を広げてゆくならば、それがまさに非拡大経済である。

経済は方法

本来、人にとって、経済は手段であり方法であった。それが目的となったのはこの八百年のことであって、この八百年は人の世のあり方として過渡的なものである。これがゆきづまっている。歴史は転換を求めている。転換の方向を一言でいえば、経済が第一の世から人が第一の世への転換である。

西洋の「学」は、ギリシア時代に労働を奴隷に任せた貴族の「知」として成立した。生きる現実からの遊離は、キリストの神の前の真理として「真理」それ自身を自己目的化することによって正当化された。この「労働」と「知」の分裂は形を変えて生き続けている。資本主義は偽りの普遍性をおしつけ、そのもとに市場を拡大してきた。しかし今日、資本主義はもはや拡大する余地がなく、拡大を旨とする資本主義は、終焉する段階に至っている。

であるから、今日の根本問題は資本主義にかわる別の生産関係を生み出すということ自体ではない。生産関係の問題ではない。経済は手段であり方法であるという立場から、これをのり越えるのである。言いかえれば、資本主義的生産関係を使いこなす人とその組織、そのもとの世を生み出すこと、これが問題である。

そして、これを創造してゆくこと自体が、資本主語の終焉である。経済は目的ではない。大切なことは、これを使いこなすう、人を第一とする政治を生み出すことである。人としての尊厳ある生活、これこそ共通の目的である。

そのとき、資本主義がおしつける偽りの普遍性に対抗して、固有性を保守しようとするのが前提である。固有性を掘り下げ、自覚してつかむ。これなしに、固有性の保守はありえない。このゆえにまた、マコトの保守には、現状を打破する力がある。

その固有性を言葉においてつかむこと、これが基本の立場である。人とは、言葉をもって力をあわせて働きさちを受け取るのちである。このゆえに、固有性は何より言葉の段階で自覚して取り出さねばならない。その上で、固有性が共生するところとしての普遍の場を生み出す。この営みへの目的意識性が必要である。

さちを受けとる働きの場こそが、固有の言葉の生まれるところであり、ことわりの世界そのものであり、働くものが固有性に立脚して、たがいに分かりあえる土台であると考え。非西洋の固有性を深く耕して徹底し、固有性を突き抜けた生きた新しい段階の普遍性をめざす。言葉のなかに蓄えられてきた智慧は、それが直接の生産を土台にする生きた人の智慧であるかぎり、十分に掘り起こされたならば必ず通じあえる。人はわかりあえる。

マルクスによって獲得された、世界に対する目的意識性と能動性を、西洋自体にも向ける。西欧文明がおしつけた疑似の普遍性ではなく、固有性が解放された人の生き生きとした普遍性は可能である。固有性が互いを認めあつて共存し、ともに問いかける普遍の場は可能である。

没落と再生

序章の「歴史の現在」に現代日本の相対的な位置を示す指標をげた。しかし、ここにある指標はすべてこれまでの資本主義のもとにおける指標である。これらの指標が、そこに生きる人の生きがいや充実の度合いを示しているわけではない。

これらの指標において没落し果てたところから、新自由主義の政治と経済を変革し、生産者と消費者が直接につながり共生し、人として互いに敬い尊厳を認めあう世を生みだしてゆかねばならない。それはつまるところ、人であることにおいて等しく尊厳しい認めあうことであるが、この価値を制度化する世を作らねばならない。

歴史が求める可能性は必ず現実に転化することができる。しかし、その途はまだ明かでない。可能性を現実性に転化するための実践的方途は、開かれた問題のままである。現在を転換するこの途を見いだしていくには、膨大な努力の蓄積と、現実のちからが不可欠である。

すでに述べたように、人にとって経済は手段であつて目的ではない。この五百年、近代資本主義において経済は目的であつた。金儲けは至上の目的であつた。しかし、昔からそうであつたのではない。人はながく、協働して自然からの恵みを得て、助けあつて生きてきた。経済はそのための手段であつた。一万年を超える新石器時代以降の人歴史のなかで、経済が目的であつたのはこの五百年にすぎない。

もとより奴隷制社会や封建社会が成立すると、実際に働くものは経済以前のところで収奪されてきた。だから、フランス革命や明治維新とそれにつづく近代資本主義そのものは必然であつた。しかし今日それはもはやのりこえねばならないところにまできてい

る。経済は手段にすぎないという人の原点に立ちかえることを歴史は求めている。

かつて社会主義は資本主義経済に代わる計画経済をやるうとして失敗した。そこにはやはり経済を第一の目的とする資本主義の思想から抜けだせないという面があった。物の生産を第一とする唯物論、単純唯物論による経済第一の社会主義は失敗した。こうしてまたその時代にはじまる政治組織、いわゆる左派政党も歴史的役割を終えた。情報技術的には輪転機と鉄道時代にはじまる「共産党」や「労働党」などを名のる政党が現代の人々の願いの受け皿となり得ず、党派の利害を優先することで人々に見放されつつあるのも、必然である。

今日の根本問題は、資本主義にかわる別の生産関係を生み出すということ自体ではない。生産関係はそのままにしても、経済は手段であり方法であるという立場から、これをのり越えるのである。言いかえれば、資本主義的生産関係を使いこなす人とその組織、世のあり方、これを創造してゆくこと、それが緑の社会主義であり、その広がり自体が、資本主義の終焉である。

終章

言葉を耕せ

言葉において深く根づく人々こそ、言葉をこえて結ばれる。日本語のことわりにおいて考え、生きんとするものがあるかぎり、希望はある。新たな世の形ができるまでには、さらに困難な段階を踏まねばならない。だがそこに人の再生がある。日本近代百五十年の苦悩は新しい時代の肥やしであり糧であり、新しい時代の深い普遍の礎である。

『神道新論』のなかで、

近代日本語によって、塗り込められ封じ込められた日本語のいのちを解きはなち、現代に甦らせること、これが近代を越えて次の時代をひらこうとするものの基礎でなければならぬ。

日本列島の歴史を踏まえ、今日ここに住むものの生き方を考えてゆくためには、ながくこの列島弧に住み、その風土とともに育んできたものの見方、考え方を、もういちど取り出し、時代に応じてそれを深めなければならない。

と書いた。

この日本語をもういちど人の言葉として甦らせるための基礎作業として、言葉を紡ぎながらここまでやってきた。その内容は次

の二点にまとめられる。

第一は、基本的な言葉の再定義である。これを経なければ立ちかえるべき根拠から考えることができなくなつてゆくからである。言葉は、言葉の構造を支える根のある言葉から、必要な言葉を定義してゆかなければならない。しかし近代日本語はそのようにはなされなかった。その結果、いわゆることわりの言葉が高校生にとつて内からの言葉となりがたく、納得した論証を構築することができない。

第二は、一万五千年以上にさかのぼる縄文文明、三千年前にはじまる弥生文明、その混成語として形成されてきた日本語は、言葉としての構造と、その構造によって支えられるものの方考え方をもっている。再定義を通してそれを自覚的に取り出してゆく。歴史は近代日本語の見直しを求めている。日本語をもういちど定義し直せ。根のある言葉で考え、そして行動する。近代を教訓に、この大転換の時代に根のある変革をおこなえ。それが、近代の果てにおいて、いま歴史が求めることである。

言葉を再定義するというのは、人生の経験として学んだ言葉の意味や意義を、辞書を通して古人の用法と照らしあわせてうえで、もういちど自分の言葉で書き直すことである。これを、言葉を拓き耕すことと言おう。一つ一つの言葉を味わい、相互にその意味を書き定めてゆく。そして、どんなことも、みずから納得できるまでその根拠を問う。これが、言葉を拓き耕す営みである。

互いを敬え

資本主義の価値観とは異なる、別の生きる道を模索する人々の運動が、裾野を拡げている。物質的な豊かさを求めるのではなく、人の輝きを奪い尊厳を踏みこむ、そのことへの怒りが人々を突

き動かし、世を下から動かしてゆく。そういう時代がはじまって
いる。

経済は目的ではない。人としての尊厳ある生活、これこそ共通
の目的である。人々がやむにやまれず立ちあがるのは、人として
の尊厳が冒されるときである。

日本の言葉の教えることを聴こう。「たみ(民)」の語る言葉こ
そが本当の「こと」である。つまり「まこと(真言)」である。その
根拠は「民」が働く人であり、実際に自然と交わる人であり、人
間が存在する形そのものだからである。「たみ」は万葉集にも出る
古い言葉であるが、「田一人(臣)」「たーおみ」から来ているの
ではないかと考えられる。田で働くものをいう言葉である。

「田」とは何か。「た」は「たから(宝)」、「たかい(高い)」、「たか
い(貴い)」などとともに、「たか」を共通にする。「たか」は「得難
い立派な」を意味した。「田んぼ」は泥田、水田を指す。紀元前九
く十世紀の頃、タミル人が日本列島にもちこんだ技術である。稲
作そのものは縄文時代から行われていた。タミル人がもちこんだ
のは技術としての水田耕作である。栽培された稲そのものは在来
種であったかも知れない。水田でない耕作地は「はた(畑)」とい
うが、後に「田」は乾田も意味するようになった。

「たがやす(耕す)」は、「もの」のできる「所」である「田」を
「返す」ことによって、ものがなるようにすることである。「たか
へす」が古形、「田を返す」から来る。作物を作るために田畑を掘
り起こし、すき返して土を柔らかくにする。

人の営みとは、田を耕すことによってものが成るようにするこ
とである。人は「もの」を直接には作らない。「田」を返すこと
によって豊に「なる」ようにする。「耕す・人」と「所の・田」とそ
して「そこになる・もの」の三者の相互関係が労働、ひいては人
の営みの基本的な型である。民とは「耕す人」である。それは、言

葉を通した協働によってなされてきた。

それぞれの分野で、耕す人たれ。これが、日本語の内に伝えら
れてきた智慧の言葉である。そしてそのような人とうし、互い
を敬え。そしてこのたがいの敬いを基礎に、すべてのものの生き
る権利が等しく保障される世を生みだす。それがいま歴史が求め
ることであり、なさねばならぬことである。

私は、人のあるべき様を、前著『神道新論』において、日本語
に伝えられてきた智慧を神道の教えとして取り出した。

第一に、人はたがいに、いのちのやどる人として、尊敬し
あい、敬いあい、いたわりあえ。人のさまざまな力は、けっ
してその人の私のものではない。世にかえしてゆかねばなら
ない。人を育て、人に支えられる世であらねばならない。今
日の日本では、人は金儲けの資源でしかない。このような世
のあり方は神道に背く。

第二に、言葉を慈しめ。人は言葉によって力をあわせて働
き生きてきた。言葉は構造をもつ。新たな言葉は、その構造
に根ざして定義されねば意味が定まらない。近代日本の言葉
の多くはこの根をもたない。これでは若者の考える力が育た
ず、学問の底は浅く、言葉が人を動かす力も弱い。もういち
ど近代日本語を見直せ。

第三に、ものみな共生しなければならない。いのちあるも
のは、互いを敬い大切にしなければならぬ。生きとし生け
るものを大切にせよ。無言で立つ木々のことを聴け。金儲けを
第一に現代の技術で動かすかぎり、核発電所はかならずいの
ちを侵す。すべからく運転を停止し、後の処理に知恵を絞れ。

第四に、ものみな循環させよ。使い捨て拡大しなければ存
続しえない現代の資本主義は終焉する。人にとって、経済は

さちを得て人として生きるための方法であって、目的ではない。人が人としてたがいに敬い協働し、いのちが共生する世のためにこそ、経済はある。経済が第一のいまの世を、人が第一の世に転換せよ。

第五に、たがいの神道を尊重し、認めあい共生せよ。神のことを聴き、そして話しあえば途はひらける。国家は方法であって目的ではない。戦争をしてはならない。戦争はいのちと日々の暮らしを破壊する。まして戦争で儲けてはならない。専守防衛、戦争放棄、これをかたく守れ。

これが日本神道の教えることである。そしてこれは、固有性を徹底して掘り下げることによって得られた普遍であり、日本を越えて世界によびかけることでもある。この五項目の教えを、人の理、ひとのことわり、と言おう。前著で指摘したように、近代日本の国家神道は、この神道の教えとは真逆のものであり、それが二つの敗北の根源にある。

近代日本の世において、人はまことの人であったか。人において人は打ち立っていたか。

このことは、二度の敗北を経ても省みられることなく、総括もされず、日本の世は何ら変わらなかつた。この日本語に伝えられてきた理は、今の世の理とはなっていないのである。人の理をひらき、世の礎とせよ。そして、根のある言葉で根拠を問え。これが歴史の求めることである。

ここにまた、まことの科学がはじまる。根拠を問うとは、すべてを疑い根本において、根のある捉えることである。さらにその根拠をも問い直す。この永続運動が科学である。日本近代の教育において、このようなまことの科学は伝えられたであろうか。

立ち連なれ

人は、言葉によって協同して働くことにおいて人である。人であることの条件とは、言葉とそれにもとづく協同の労働である。言葉は、まずはそのときの手持ちの言葉で考えなければならぬ。それが思いの丈を表せていないと感じるとき、そこに新しい言葉を見いだそうとする促しがおこる。このことを心にとめながら、核惨事の中にある今を考え、新しい時代の新しい人の言葉を、古くからの豊かな言葉をもとに生みだす。

経済から人への転換の場において、言葉を拓き耕し、ものごとと、自然と人、物と力を分け離すことなくつかみ、そして語れ。言葉において深く根づく人々こそ、言葉をこえてただ人として、結ばれる。そこに新しい力が生まれる。それだけが新しい時代の深い普遍の礎である。

普遍的な課題とは、資本主義の終焉を見すえ、資本主義以降を構想することであり、その構想の下に次の時代を創ってゆくことの一環として当面する課題を闘い、この構想を深めてゆくことである。

前著『神道新論』で述べたように、この課題の実践は、一般化された議論とそれのもとでの実践だけでは不可能であり、それぞれの固有性に根ざした思想と、そしてその運動を経なければ不可欠である。日本語に蓄えられてきた智慧としての日本神道は、それとは真逆の国家神道の下にあった近代日本を逆に照し出し、次の時代の構想と、そこに向けて今をいかに生きるかについて、深い示唆を与える。

前著は日本語に蓄えられてきたこの智慧を取り出すための基礎作業であった。本書はそれをふまえ、時代の課題、歴史の求めに応え、資本主義以降の歴史の扉を開くことについて、掘り下げて

考えようとするものである。

日本はいま大きな分岐に直面している。この分岐は、もはや何を選択するかという選択の内容や方向をめぐる分岐ではない。人民の内部について言えば、能動的に選択するのか、それとも無自覚に流されてゆくのかの分岐である。

能動的に選択しようとする側にも、当然にさまざまな立場と意見の違いがある。しかしその内部では、思想信条の自由にもとづき、互いを認めあつて議論を行い、そのうえで当面する政治課題においては行動を統一する。このことが、目的意識をもつて追究される。アベ政治を終わらせるという課題で一致するものは、副次的な違いをひとまず横に置いて、行動で統一しなければならぬ。その意味で、この分岐は、選択しようとする民主主義か、流れゆく全体主義かの分岐である。政治的には、この全体主義をのりこえ民主主義を実現するのか、これをそのまま続けさせるのか、この分岐である。

コロナ疫病の蔓延のなかで権力まで介入しての同調圧力が強まった。これはかつての十五年戦争の時代の世のあり方を彷彿とさせるものであった。無意識のままに同調圧力をかける側が多数であり、それが今の世のあり方であるとしても、しかし、ここまでとも考えてきたものは、そのような考え方から実際のつきあいまでにあるこのような圧力を自覚的におさえ、そのうえで立たねばならない。

八百年の経済を第一とする西洋の時代のその行きついた果てが、帝国アメリカである。これにかわる、人の理にもとづく新しい世が、崩壊する帝国のもたらず混乱と混迷からの活路である。これ以外にない。

その前提が、心あるものが立つことである。

日本について言えば、ここにアメリカからの独立という問題の

真の意味がある。原爆と核惨事を経験したわれわれは、この最大の問題の当事者である。この立場と観点をしっかりとって、深く掘り下げることが必要だ。それなくして対米自立もまたありえない。この大きな問題と、心あるものが立つかという問題とは、一体である。そして、新たな世を生みだしてゆくために、こころざしを同じくして立つものは、連なり、手を繋ぎ、前に進まなければならぬ。いま実際に各地で行われているが、生産者と消費者が配達者を仲立ちに直接に繋がりがあ、その輪が横に広がり、生産、配達、消費の人らが互いに敬いあう関係は、一定の基盤と広がりをもっている。

このようなつながりの積みあげと広がりが、人の尊厳を奪う権力に対する闘いと結びつくとき、政治を変え、経済ではなく人を第一とする世を生みだしてゆく。人は金儲けの資源ではない。人それ自体が尊厳あるものとされる世であらねばならない。

新自由主義の政治と経済を変革し、拓き耕すところにおいて生産者と消費者が直接につながり共生し、人として互いに敬い尊厳を認めあう世を生みだしてゆかねばならない。

かつてマルクスは資本主義を分析し、基本矛盾を明らかにした。その基本矛盾と地球の有限性のゆえに、資本主義は終焉のときをむかえている。このとき、われわれの課題は創造である。歴史の新しい段階を担う人の創造である。それが歴史が求めることであり、序章にも書いたが、歴史の要求することは実現可能なことなのである。

日本語に伝えられてきた智慧をくみとり、言葉をつむぎ、資本主義近代を超えるために、いまなしうることをなす。それが根のある変革の第一歩である。資本主義に縛られた生活を変え、人として立ち、そしてそのようなものどうしがいに認めあつてつながり、世を動かしてゆくようではないか。

関連図書

- [1] 『日本国語大辞典』（初版『全二十卷』 小学館、1972～1976）
 [2] 『国語大辞典』 小学館、1981
- [3] 大野晋 他『岩波古語辞典』（補訂版） 岩波書店、1990
- [4] 大野晋編『古典基礎語辞典』 角川書店、2011
- [5] 折口信夫『古代研究（國文学編）』（全集第一巻）
- [6] 折口信夫『古代研究（民俗学編一）』（全集第二巻）
- [7] 折口信夫『古代研究（民俗学編二）』（全集第三巻）
- [8] 折口信夫『古語復活論』（「アララギ」第十巻第二号）、大正六年二月
- [9] 折口信夫『古代人の思考の基礎』（初出「民俗学 第一巻五・六号」第二巻第二号）1929（昭和四）年十一月、1930（昭和五）年二月。全集第三巻『古代研究』所収。
- [10] 折口信夫『女帝考』（『思索』第三号、昭和二十一年十月）。全集第二十巻『神道・国学論』所収。
- [11] 折口信夫『即位御前記』『史學』第十九巻第一號、昭和十五年八月。
- [12] 折口信夫『宮廷生活の幻想—天子即神論是非—』『日本歴史』第二巻第三號、昭和二十二年。
- [13] 折口信夫『み雪ふる秋』『短歌公論』第二巻第六・七號、昭和十三年六・七月。
- [14] 折口信夫『古代人の信仰』『惟神道』第二巻第二～四號、昭和十七年二～五月。
- [15] 折口信夫『原始信仰』『郷土科學講座1』、昭和六年九月。
- [16] 折口信夫『死者の書』
- [17] 時枝誠記『國語学原論』岩波書店、1941
- [18] 時枝誠記『國語学原論続編』岩波書店、1935
- [19] 時枝誠記『國語学史』岩波書店、1940
- [20] 時枝誠記『日本文法口語編（岩波全書）』、1950
- [21] 時枝誠記『現代国語教育論集成』『編集委員会編』明治図書、1989
- [22] 大野晋『日本語の起源』〔岩波新書289〕、1957
- [23] 大野晋『日本語の起源新版』〔岩波新書340〕、1994
- [24] 大野晋『日本語をさかのぼる』〔岩波新書692〕、1974
- [25] 大野晋『日本語練習帳』〔岩波新書596〕、1999
- [26] 大野晋『日本語の教室』〔岩波新書800〕、2002
- [27] 大野晋『日本語の形成』岩波書店、2000
- [28] 大野晋『一語の辞典 神』三省堂、1997
- [29] 大野晋『弥生文明と南インド』岩波書店、2004

- [30] シモーヌ・ヴェイユ『一叙事詩をとおして見たある文明の苦悶(1940年代初頭)』『著作集』第二巻所収。春秋社、1967
- [31] シモーヌ・ヴェイユ『オク語文明の靈感はどこにあるか(1940年代初頭)』『著作集』第二巻所収。春秋社、1967
- [32] シモーヌ・ヴェイユ『ノアの三人の息子と地中海文明史(1940年代初頭)』『著作集』第IV巻所収。春秋社、1967
- [33] 柳父章『翻訳語成立事情〔岩波新書189)』、1982
- [34] 柳父章『翻訳語を読む』丸山学芸図書、1998
- [35] 柳父章『近代日本語の思想』法政大学出版社、2004
- [36] 三上章『象は鼻が長い』くろしお出版、1960
- [37] 三浦つとむ『日本語はどういう言語か』季節社、1971
- [38] 村山七郎・大林太良『日本語の起源』弘文堂、1973
- [39] 吉田金彦『古代日本語をさぐる〔角川選書102)』、1979
- [40] 井上ひさし『私家版日本語文法』新潮社、1981
- [41] 井上ひさし『ニホン語日記』〔文春文庫450)』、1996
- [42] 荒木博之『やまとことばの人類学』〔朝日選書293)』、1983
- [43] 森本哲郎『ニホン語 表と裏』〔新潮文庫360)』、1988
- [44] イ・ヨンスク『「国語」という思想』岩波書店、1996
- [45] 長戸宏『大和言葉を忘れた日本人』明石書店、2002
- [46] 金谷武洋『日本語に主語はいらない』講談社選書230、2002
- [47] 中西進『ひらがなでよめばわかる日本語』〔新潮文庫)』、2003
- [48] 木村紀子『古層日本語の融合構造』平凡社、2003
- [49] 田中孝顕『日本語の真実』幻冬舎、2006
- [50] 金容雲『日本語の正体』三五館、2009
- [51] やまとことば』〔ことば読本)』河出書房新社、1989
- [52] 液化化する日本語『現代思想』、1998
- [53] 日本語論『環』、2001
- [54] 日本語は亡びるのか? 『ユリイカ』、2009
- [55] 小林恵子『倭王たちの七世紀—天皇制初発と謎の倭王』現代思潮社、1991
- [56] 小林恵子『三人の神武』文藝春秋社、1994
- [57] 小林恵子『広開土王と「倭の五王」』文藝春秋社、1994
- [58] 小林恵子『解説「謎の四世紀」』文藝春秋社、1995
- [59] 小林恵子『興亡古代史—東アジアの覇権争奪1000年』文藝春秋社、1998
- [60] 小林恵子『本当は怖ろしい万葉集—歌が告発する血塗られた古代史』(祥伝社黄金文庫)、『2007
- [61] 小林恵子『古代倭王の正体 海を越えてきた霸王たちの興亡』(祥伝社新書)、『2016
- [62] 藤田英夫『物流理論が縄文の常識を覆す』東洋出版、2003
- [63] 小田実『玉碎』岩波書店、2006

- [64] 飯田進『魂鎮への道―BC級戦犯が問い続ける戦争』岩波現代文庫、2009
- [65] 鬼塚英昭『日本のいちばん醜い日』成甲書房、2007
- [66] 鬼塚英昭『黒い絆 ロスチャイルドと原発マフィア』成甲書房、2011
- [67] 浜矩子『死に至る地球経済』岩波、2010
- [68] 『原発危機と「東大話法」―傍観者の論理・欺瞞の言語』安富歩、明石書店、2012
- [69] 『幻影からの脱出―原発危機と東大話法を越えて』安富歩、明石書店、2012
- [70] 室伏志暉『誰が古代史を殺したか』世界書院、2014
- [71] 水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社、2014
- [72] 雁屋哲『美味しんぼ「鼻血問題」に答える』遊幻舎、2015